報告

乳幼児との継続的交流実習を組み入れた体験型コミュニケーション授業

長宗雅美[1)]　山田進一[2)]　高井恵美[3)]　寺嶋吉保[1)]
[1)] 徳島大学大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部医療教育開発ｾﾝﾀｰ　[2)] 山田こどもクリニック　[3)] 徳島赤十字病院

要約：現代の大学教育では、従来からの専門教育と共に、人間力をバランスよく育むことが求められている。対人援助を目的とする医療系学部において、その期待は特に強い。しかしその一方で現代社会は人間関係が希薄になり、「人」が成長しにくくなっている。実際の教育現場においても学生の社会性の欠如・人間性の未熟さを実感する場面が少なくない。徳島大学では文部科学省の補助金を得て、平成18年度後期より平成20年度まで､乳幼児との交流実習を取り入れたコミュニケーション授業を行った。その結果、乳幼児との継続的な交流実習が、座学の授業や学生同士のロールプレイでは得ることが困難と思われる気づきや、高いモチベーションをもたらすことがわかり、学生の人間性に働きかける教育法であることが示唆された。この有効性と効果について考察した。
（キーワード：人間力、医療系学生、乳幼児との継続的交流実習、体験型授業）

Experiencing communication class including a continual training with infants and children
-Significance of continual communication training-

Masami Nagamune[1)] Shinichi Yamada [2)] Emi Takai[3)] Yoshiyasu Terashima[1)] Mayumi Yamamoto[4)]
([1)] Research Center for Education of Health Biosciences Institute of Health Biosciences University of Tokushima Graduate School, [2)]Yamada Children's Clinic, [3)]Tokushima Red Cross Hospital, [4)]Faculty of integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima)

Abstract : In contemporary university education, there is a growing recognition of the need to provide students with well-balanced human skills together with specialized knowledge of their major field. This issue has become a strong requirement of most curricula and faculty of medical and paramedical schools. On the other hand, an increasing number of students applying to human health care and welfare schools show poor communication and social skills. To tackle this problem, we have introduced from 2006 to 2008 a communication class including a continual training with infants and children. As a result, the continual interaction with infants and children contributed to enhancing not only students' human skills, but also their motivation. These skills that are difficult to develop only by lectures or role play between fellow students. The present paper describes the methodology and discusses the usefulness and the significance of the continual communication training with infants and children.
(Key words: human skills, medical student, a continual communication training with infants and children, experiencing communication class)

１．はじめに

これまで我々は、座学や演習を主とした様々なコミュニケーション授業を行ってきた。しかし学生の態度変容に結びつくような授業効果を得ることができなかった。人間力やコミュニケーション能力は成長の過程で培われ、大学教育であえて行うものではないとの意見もあった。しかし、現代社会では、少子化や物質的生活の向上などによる社会的変化に伴い、人間力を身につけるために重要かつ効果的な環境が失われていることが指摘されている[(1)]。その一方で、多様化する社会では、高い志と広い視野のもとに対人能力や実践行動力を持つ人材が求められている[(2)]。

学生自らがコミュニケーション力の不足に気づき、自ら学ぶモチベーションを高められる授業を模索していたところ、平成17年度夏、鳥取大学における高塚氏らの『ヒューマン・コミュニケーション授業』に出会った[(3,4,5,6)]。その授業の有用性を感じ視察を重ね、徳島大学での『ヒューマン・コミュニケーション授業』を企画した。

この取組は､文部科学省平成18年度大学改革推進事業｢現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に採択され、我々は平成18年度後期より平成20年度まで､乳幼児との継続交流を組み入れ

た体験型コミュニケーション授業を実施した[7,8,9]。

２．目的

本取組が本格的に実施された平成 19 年度と平成 20 年度の学生アンケート結果、レポート分析をまとめ、継続的交流実習を組み入れた体験型コミュニケーション授業の効果および、継続的交流実習の意義について明らかにする。

図１　取組の全体像（補助金申請資料より）

３．授業の概要と実施

この授業は、医療人としての人間形成を目指し、実践的な経験・実習の場を保育所に設定し、学生の人間力を培うことを目的とする、体験型の授業である（図 1)。また、その実施が地域の子育てを支援することも目指した。

１）学生の受講状況

・平成 18 年度：「医学入門」選択コースにてトライアル実施

医学科 1 年生希望者 20 名受講

・平成 19 年度：全学共通教育科目として実施

医学科 1 年生 95 名受講

保健学科看護学専攻 1 年生 70 名受講

・平成 20 年度：全学共通教育科目として実施（受講枠拡大）

医学科 1 年生 95 名受講

保健学科看護学専攻 1 年生 67 名受講

歯学部 1 年生 1 名受講

薬学部 1 年生 2 名受講

●計 **350 名**が受講

２）授業の構成

この授業は「学内演習」「乳幼児との継続的交流実習」「児童館における子育て支援体験実習」「振り返り授業による『学び』の共有」という 4 つの要素を柱として組み立てた。毎回、前回の授業における反省点を活かし、演習・実習回数を適宜変更した。

①学内演習

・特別講演：鳥取大学高塚人志准教授による講演

・学生同士のロールプレイによるコミュニケーションスキルトレーニング

－テーマ－

「聴く」

「ホスピタリティを学ぶ」

「ノンバーバル・コミュニケーション」

「協力について」

・交流実習準備

「パートナーの決定」

「ゼッケン（名札）作成」

「プレゼント作成」（2 回）

「自己紹介の手紙作成」

②乳幼児との継続的交流実習

地域の保育所に毎週 1 回（9：00～11：55）出向き、特定のパートナーとの継続的に 1 対 1 の交流を行う。（全 7～10 回）

③児童館における子育て支援体験実習

土曜日に徳島市内の児童館に出向き（10：00～17：00)、初対面・複数の子ども達と交流する。(1 回)

④振り返り

交流実習中間と実習終了後の計 2 回、学内において学生同士で気づきや悩みについて意見交換し、学びを共有する機会とする。

３）実施経過

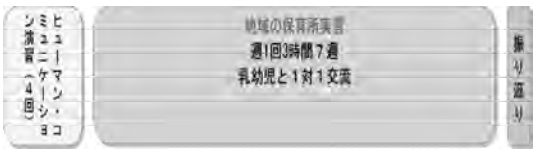


図 2－1　平成 18 年度授業の構成

平成 18 年度は、翌年からの本格実施に向けて、授業全回数 12 回のトライアル実施を行った（図 2-1)。この授業実施により、継続的交流を一気に行うと、体験実習により生じる学生の気づきや学

びを深めることができないことがわかり、交流実習中間に、「中間振り返り」の時間を持つことが提案され、以降の授業に活かした。

図 2ー2　平成 19 年度授業の構成

平成 19 年度は、全 16 回授業として本格実施をスタートした（図 2-2)。平成 18 年度に行った学内演習を 3 回にまとめ、継続的交流実習全 10 回の間に、学内にて意見交換を行う「中間振り返り」の授業を設けた。またこの年度から、徳島市内の児童館において、様々な年齢の子どもを理解する体験の場として、地域の児童館実習（1 回）を加えた。

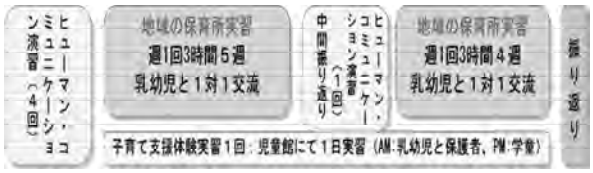


図 2ー3　平成 20 年度授業の構成

平成 20 年度は継続的交流実習前の学内演習を 4 回に増やした（図 2-3)。これは平成 19 年度の保育所職員との反省会において、挨拶や態度など、学生の社会的マナー意識が低いことが指摘されていたため、学生同士で「実習に望む態度」について考え、発表する学内演習を設けたものであった。また、学内演習を増やすことにより交流実習を 1 回減らしたが、これは教員の実感から、交流実習は 9 回でも有効であると判断したためであった。

４．方法

平成 18 年度後期は翌年からの本格実施に向けたトライアル授業であったため今回の分析対象からは外し、平成 19 年度と平成 20 年度を対象にした。

１）出席状況調査

対象：平成 19 年度受講学生 165 名
　　平成 20 年度受講学生 165 名

２）アンケート調査

対象：平成 19 年度受講学生 165 名
　　平成 20 年度受講学生 165 名

①初回授業時と最終授業終了後に自己のコミュニケーション力に関する意識について、8 項目の同じアンケートを行った。

②最終授業終了後に自己のコミュニケーション力の変化に対する意識をアンケートにて調査した。

③最終授業終了後に授業そのものに対する評価をアンケートにて調査した。

３）レポート分析

全授業終了後に学生おのおのが「授業を通して自己が成長できたと思うこと」を 3 つづつ自由記載している。学生が自分自身のどの部分に成長を意識したのかを探った。

対象：平成 19 年度受講学生 165 名
　　平成 20 年度受講学生 165 名

５．結果

１）出席状況（図 3)

本授業以前に行われていたコミュニケーション授業では常に 1 割ほどの欠席者がいたが、この授業では平成 19 年度は 99%、平成 20 年度は 97%と、出席率が高かった。

また、遅刻しても授業に出席しようとする態度が見られた。

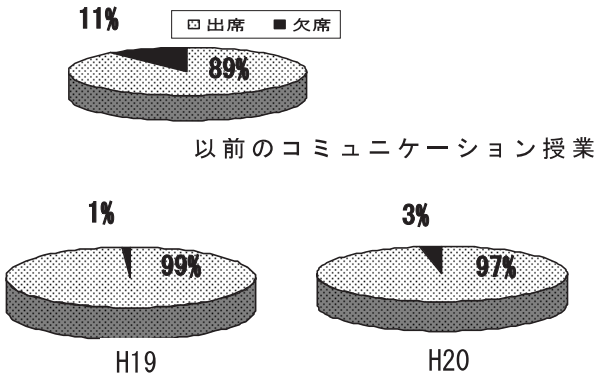


図 3　出席状況

２）アンケート調査

①コミュニケーション力に関する受講前後の自己評価（図 4)

初回授業と最終授業の際、自己のコミュニケーション力に関する同一のアンケートを行った。ア

ンケート項目は、以下の８項目である。

1. 私は他人と関わるのが苦手ではない。
2. 挨拶や自己紹介が苦手ではない。
3. 相手と目線を合わせて、暖かいまなざしで対応できる。
4. 相手の表情や行動から相手の気持ちをくみ取ることができる
5. 相手の気持ちや考えを受け止めた上で行動することができる。
6. 自分や仲間の長所を素直に受け止めることができる。
7. 乳幼児とふれあうことは苦手ではない。
8. 少しでもコミュニケーション力を高めたいと思う。

平成 19 年度、20 年度との間に大きな差はみられなかった（図 4）。①、③、⑤の項目では約半数が苦手ではないと答えていた。⑥の自分や仲間に対する項目では苦手でないと答えた学生は 70～80%に上った。⑦の乳幼児とふれあうことは苦手でないと答えた学生は平成 19 年度、20 年度とも約 60％であった。④の相手の気持ちをくみ取ることができるという項目ではややポイントが下がり、②の挨拶や自己紹介に関する項目ではさらにポイントが下がっていた。そしてどちらの年度もコミュニケーション力を高めたいと答えていた学生は 90％以上であった。この８項目の意識は受講前後で大きくは変化しておらず、平成 20 年度の③、④項目以外は、受講後のポイントが受講前より低かった。

②授業を通しての自己変化意識（表 1）

学生自身の中で、8 項目それぞれについて「改善されたと思うか」という問いに関しては、60% 以上の学生が改善されたと感じていた。コミュニケーション力が高まったと感じている学生は 90% であった。この結果は平成 19 年、20 年ともほぼ同様であった。

③授業終了時に授業に対する評価をアンケートにて調査した（表 2）。平成 19 年、20 年ともすべての項目について 90％を超える結果が出ており、授業に対する満足度は非常に高かった。

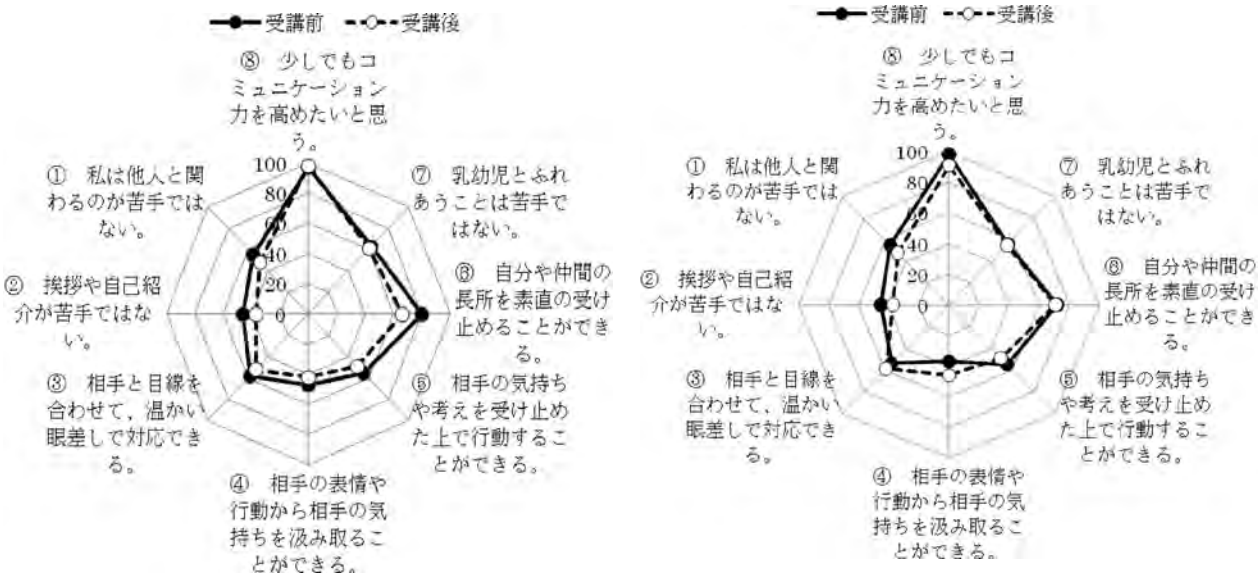
３）レポート分析

最終提出レポートの一つとして、学生自身が授業を通して成長できたと感じていることを一人 3 項目づつ、自由記載した（図 5）。医･歯･薬学生、看護学生共に、「受容」「自分自身について振り返ること」「自己コントロール」が多かった。「役立ち感」「自己肯定感」をあげた学生は 3％と少なかった。また、「子どもについて」や「子どもの世話」をあげた学生は、医･歯･薬に多く、「自己開示」をあげた学生は、看護学生に多かった。

６．考察

これまでのコミュニケーション授業とこの授業の構成の大きな違いとして、実習が継続的（9～10 回）に組み入れられていること、そして学生それぞれにパートナーが決まり、特定乳幼児と交流することにある。授業に対する出席状況はそのまま、学生の授業に対するモチベーションを示していると考えられ、平成 19 年度 99％、20 年度 97％という出席状況は学生が意欲的に授業に取り組んだと解釈できる。この授業は午前 8：40～午前 11：55 に設定されており、1 年生の学生が遅刻・欠席せず参加したことは評価できることである。自分自身に特定のパートナーが存在するこの実習形態は、学生にとって、いるべき場所となすべき役割を明確にし、知らず知らずのうちに、「私の（僕の）○○ちゃん」というオーナーシップや、「無責任な行動をとるとパートナーを悲しませる。」といった責任感を芽生えさせ学生のモチベーションを上げていると思われた。

授業前後の自己評価については、平成 19 年度、20 年度とも同じような傾向がみられた（図 4）。平成 19 年度と 20 年度では、学内演習の回数、交流実習の回数が多少変更されているが、授業効果に大きな影響は及ぼさなかったといえる。⑥の自分と仲間に関する項目では 75～80％の学生が苦手意識を感じておらず、①、③、⑤の他人とのコミュニケーションについても半数が苦手意識はないと答えていた。学生が自分自身のコミュニケーション力について、特に問題意識を持っていないと思われた。しかしいずれも⑧のコミュニケーション力を高めたいという意識は高く、コミュニケー



H19 年度受講 165 名　　H20 年度受講 165 名

図４　コミュニケーションに関する授業前後の自己評価

表１　授業を通しての自己変化に対する意識

	H19	H20
Q1. 他人と関わるのが苦手でなくなった	はい **76**%	はい **72**%
Q2. 挨拶や自己紹介が苦手でなくなった	はい **60**%	はい **62**%
Q3. 相手と目線を合わせ対応できるようになった	はい **87**%	はい **80**%
Q4. 表情や行動から相手の気持ちをくみとれるようになった	はい **74**%	はい **72**%
Q5. 相手のきもちや考えを受け止め、行動できるようになった	はい **80**%	はい **79**%
Q6. 自分や仲間の長所を受け止められるようになった	はい **85**%	はい **80**%
Q7. 乳幼児とふれあうことがすきになった	はい **88**%	はい **83**%
Q8. コミュニケーション力が高まった	はい **90**%	はい **92**%

表２　学生による授業評価

	H19 そう思う　ややそう思う	H20 そう思う　ややそう思う
Q1. この授業を選択してよかった	90%　9%(計 **99**%)	70%　22%(計 **92**%)
Q2. 実習は満足できた	82%　14%(計 **96**%)	75%　23%(計 **98**%)
Q3. 実習での学びは大きかった	90%　9%(計 **99**%)	79%　17%(計 **96**%)
Q4. この授業は改めて基本的マナーを身につけることの一助になっている	79%　19%(計 **98**%)	77%　21%(計 **98**%)
Q5. この授業はホスピタリティ・マインドへの気づきの一助になっている	86%　12%(計 **98**%)	75%　21%(計 **96**%)
Q6. この授業は役立ち感を実感し自己肯定感の芽を育むことの一助になっている	57%　32%(計 **89**%)	44%　43%(計 **87**%)
Q7. この授業はコミュニケーション力を高めることの一助になっている	80%　17%(計 **97**%)	72%　26%(計 **98**%)
Q8. この授業はこころの癒しや元気、やる気を育む一助になっている	77%　17%(計 **94**%)	68%　32%(計 **100**%)
Q9. この授業は自分を振り返る機会になっている	78%　20%(計 **98**%)	73%　25%(計 **98**%)
Q10. この授業を通して自分自身の生き方や普段の人間関係に変化があった	65%　27%(計 **92**%)	54%　40%(計 **94**%)
Q11. この授業は仲間のよいところが見える	80%　15%(計 **95**%)	75%　21%(計 **96**%)
Q12. この授業は仲間作りに役立っている	67%　26%(計 **93**%)	70%　30%(計 **100**%)

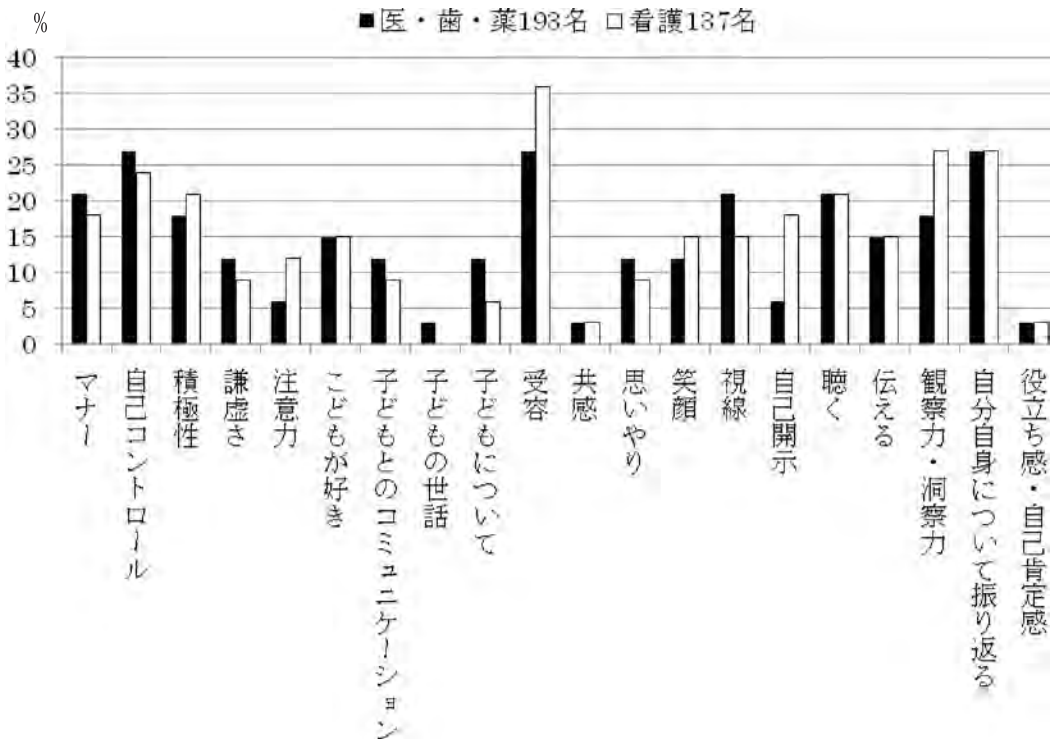


図５　授業を通し、学生自身が成長したと感じていること

ション力が必要とされている認識はあるといえる。学生の授業に対する授業後の自己評価は授業前より明らかに上昇することはなかった。むしろ平成20年度の③、④項目以外は授業後の評価がわずかに下がっていた。これは、これまで多くの場合、自分中心であったり、同じ価値観のもの同士の人間関係を構築することが多かった学生にとって、子ども達やその保護者、保育所や児童館の職員といった、異世代の人々との交流体験が、これまで感じることのなかったコミュニケーションの困難性､重要性を気づかせる機会となったと思われた。その結果、自己のコミュニケーション力に対する目標が高く設定し直されたと考えられる。多くの学生が、授業終了時に⑧項目すべてについて、「改善された」と実感していた（表1)。この中で、「Q2挨拶や自己紹介が苦手でなくなった」と答えた学生が、平成19年、20年とも60％と、他の項目に比べ低めである。交流実習ではコミュニケーションの相手は子どもだけにとどまらず、保護者、保育所の職員、出会う地域の人々と多岐にわたっている。日常的にも、それぞれの場面、関係において、望ましいとされるマナーが問題にされることが多々ある[10]。交流実習が、基本的マナーとしての挨拶や身だしなみについて、その重要性をあらためて実感する機会となっており、この意識は将来のプロフェッショナリズムへ通じる基本的態度になりえると考えられた。

学生の授業評価はきわめて高かった（表2)。達成感や満足感、自己肯定感を獲得するためには、乗り越えるべきハードルが必要と思われ、この授業には､時間厳守や自己の健康管理等にはじまり、子どもとの信頼関係構築とそのハードル的要素が多数含まれている。それを乗り越え、全授業を終了したとき、多くの学生が子どもの信頼と、保護者や教員からのお礼や励ましを受け、その結果として達成感、満足感さらには自信を得ることができたといえる。「Q8.この授業は心の癒しや元気、やる気を育む一助になっている」という項目に対して、「そう思う」と「ややそう思う」を合わせてH19年度98％、平成20年度100％という結果が出ている。交流の様子から、多くの学生が自然と交流実習を楽しんでいるように思われたが、このアンケート結果から、学生が授業に喜びを見いだして参加していたことが裏付けられた。Q11,Q12の仲間との関係に対する回答からは、この授業が、身近な仲間との交流も深め、その関係に影響を及ぼしていることがわかる。他人に適度な関心を持つことはコミュニケーションの社会的スキルを作る土台であり[10]、この実習では、その環境設定が無理なく準備されていると思われた。

学生自身が成長したと記述している項目（図5)については、自由記述であったがこの授業で期待していた項目があがってきていた。相手の立場にたって考えようとする「受容」項目がもっとも高く、子どもを理解しよう、子どものコミュニケーションチャンネルに近づこうと努力した様子がうかがえた。また、毎回の授業に参加するために、時間厳守や健康管理が必要となり、一般の講義では得られにくい、学生の行動変容をもたらしたと思われる。「子どもの世話」「子どもについて」「自己開示」項目で、医･歯･薬学生と看護学生の間に差がみられるのは男女差によるものが影響していると考えられる。学部間の特性もあるのかもしれない。「役立ち感・自己肯定感」を得たとあげた学生は少ない。自分が成長して手に入れたものとしては､実感しにくいのかもしれないと考えている。交流実習前後の学生の変化をパーソナリティ検査である「東大式エゴグラム（以下 TEG)」を用い、分析した岡本によれば、実習直後には5つの自我状態のうち、「養護的態度」と解釈されるNPが上昇する学生が 57.9%認められたと報告されている[11]。医療者に必要とされる養護的態度の向上が認められたと思われる。その他、社会人の基盤形成につながるとも考えられる「マナー」「自己コントロール」「積極性」「謙虚さ」「注意力」といった項目もあがってきている。また、上位項目には「自分自身について振り返る機会になった」という回答も見られる。青木[12]は青年期の発達過程において、自己の意識的内省、自己理解が他者理解の向上に変化をもたらすと報告している。この交流実習は対人援助を目的とする医療系学生にとって、他者理解の意識を深める有意義な機会となりえるといえる。

７．結論

乳幼児との継続的交流実習を組み入れた体験型コミュニケーション授業は学生の意識･行動変容に有効であり、異世代間交流の乏しい社会においては、学びの場のひとつとして、このような授業の必要生が高い。

８．おわりに

2 年半の期間に 350 名が受講したこのコミュニケーション授業は、『みなさんが選ぶ優れた授業』で徳島大学平成 19 年度前期共通教育賞、平成 20 年度前期共通教育賞を受賞するなど、高い学生評価を得た。補助金事業終了後、平成 21 年度からも徳島大学全学共通教育の授業として受講枠を医療系学部以外にも拡大し、継続実施されている。子ども達の笑顔やぬくもりから、学生が得たものは多々あったのではないだろうか。しかしせっかく何らかの効果を認めたとしても、短期的な実践のみでは記憶に薄れていくことも確かであろう。岡本[11]も実習直後に上昇した NP が、半年後、1 年後には 42.2%下降していたと報告している。このよい意識・行動変容を維持してゆく為には、卒業までに、どのような働きかけが必要なのかも続けて検討してゆきたい。

謝辞

本授業実施のためにご支援・ご指導いただいた鳥取大学准教授高塚人志先生はじめ、本授業を全学共通教育　社会性形成科目群の授業として定着させていただくことにご尽力いただいた徳島大学ｿｼｵ･ｱｰﾂ･ｱﾝﾄﾞ･ｻｲｴﾝｽ研究部　佐野勝徳教授、ご協力いただいた地域の皆様、そして子ども達に心から感謝いたします。

参考文献

1) 堀田力：「人間力」の育て方　集英社新書 2007
2) 人物試験技法研究所：人物試験におけるコンピテンシーと「構造化」の導入　平成 17 年 8 月
3) 高塚人志：いのちにふれる授業　小学館 2004
4) 高塚人志：いのち輝け子どもたち　今井書店 2006
5) 高塚人志：いのちを慈しむヒューマン・コミュニケーション授業　大修館書店 2007
6) 高塚人志：そばにいる人から喜ばれる喜び　今井書店 2007
7) 徳島大学大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部：医療系学生の保育所実習による子育て支援−初年度報告書Ⅰ、Ⅱ　2007
8) 徳島大学大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部：医療系学生の保育所実習による子育て支援−平成 19 年度取組成果報告書　2008
9) 徳島大学大学院ﾍﾙｽﾊﾞｲｵｻｲｴﾝｽ研究部：医療系学生の保育所実習による子育て支援−取組成果報告書　2009
10) 大坊郁夫：しぐさのコミュニケーション　サイエンス社 2006
11) 岡本愛：体験型コミュニケーション授業の効果−心理臨床的視点から−　徳島大学大学院人間・自然環境研究科修士論文（未公刊）2009
12) 青木万里：自己理解に関する文献研究　埼玉純真短期大学研究論文集　第 2 号　1−15

交流実習の様子